

日中対照言語学会第50回大会(2024年度 春季大会)

プログラム

日 時	2024年5月12日(日) 9:20~16:20 (予定)		
会 場	オンライン会議(Zoom)	参 加 費	無料(会員・非会員共通)
Zoom URL	https://us06web.zoom.us/j/89383634279?pwd=bSq11bEuO6LrGsPkjvADlbZ8qIC05B.1 (分科会 A / B / C もこの URL から入ります) (分組 Zoom 号同大会 Zoom 一样) ミーティング ID : 893 8363 4279 パスコード : 297997		
入室可能時間	9:00~		
開 会 の 辞	9:20~9:25	副会長 下地 早智子(神戸市外国語大学)	
移 動 時 間	9:25~9:30	分科会 A/B/C にご移動下さい	

(総合司会: 岡原 丞良(関西大学・非))

分科会 A

午前の部			
順 番	題 名	発 表 者	時 間
研究発表 A-1	中国人大学生のグループチャットにおける 愁(dui)について —傍参与側の反応に着目して—	方 敏 (東華理工大学講師)	9:30~10:00
研究発表 A-2	“我们在这儿可以休息休息吗?” は非文なのか	林 嵐娟 (大阪公立大学非常勤講師)	10:05~10:35
司 会		王 安 (法政大学)	
研究発表 A-3	「告げ口表現」における裸動詞の 完了を表す用法に関する考察	劉 士沢 (名古屋大学・院)	10:40~11:10
研究発表 A-4	発話連鎖の観点からみた中国人日本語学習者の ほめへの肯定型応答の出現パターン	張 晨 (広島大学・院)	11:15~11:45
司 会		勝川 裕子 (名古屋大学)	
昼 休 憩 / 理 事 会 (別 URL)			11:45~13:30
午後の部			
研究発表 A-5	ホームベースによる視点選択について —空間移動を表す「来る・行く」と “来/去”の類を中心に—	東 睿 (京都大学・院)	13:30~14:00
研究発表 A-6	現代若者の自然会話における ぼかし表現の使用実態 —性差に着目して—	王 凱男 (岡山大学・院)	14:05~14:35
司 会		下地 早智子 (神戸市外国語大学)	
研究発表 A-7	疑問詞連鎖句 WH 要素同指関係再考	王 芸嫻 (立命館大学外国語嘱託講師)	14:40~15:10
研究発表 A-8	「わかる」と共起する「NP のこと」の 使用条件に関する一考察 —学習者の誤用を手掛かりに—	徐 筱琦 (関西学院大学・院)	15:15~15:45
司 会		安本 真弓 (跡見学園女子大学)	
閉 会 の 辞		会長 彭 飛(京都外国語大学)	15:50~15:55
会員総会			15:55~16:20

↓

分科会 B

午前の部			
順 番	題 名	発 表 者	時 間
研究発表 B－1	合意形成談話における「カモシレナイ」の 婉曲用法の使用傾向 ―日本語母語話者を対象に―	郭 婧 (広島大学・院)	9:30～10:00
研究発表 B－2	日本語の「使役移動表現」における習得研究 ―中国人日本語学習者を対象として―	姜 雨軒 (大連外国語大学・院)	10:05～10:35
司 会		豊嶋 裕子 (東海大学)	
研究発表 B－3	「VP の/ことができる」という構文における 形式名詞「の」と「こと」の選択条件	張 夢華 (関西学院大学・院)	10:40～11:10
研究発表 B－4	“自己”の照応用法に関する研究	孫 盈盈 (大阪大学・院)	11:15～11:45
司 会		続 三義 (東洋大学)	
昼 休 憩 / 理 事 会 (別 URL)			11:45～13:30
午後の部			
研究発表 B－5	中国人日本語学習者による 「自律移動表現」の習得研究	黄 巧靈 (大連外国語大学・院)	13:30～14:00
研究発表 B－6	情報縄張り理論に基づいた 終助詞「よ」の談話機能	顔 曉冬 (大連外国語大学日本語教師)	14:05～14:35
司 会		加藤 晴子 (東京外国語大学)	
研究発表 無し			14:40～15:10
司 会			
閉 会 の 辞		会長 彭 飛(京都外国語大学)	15:50～15:55
会員総会			15:55～16:20

次ページに続く



分科会 C

午前の部			
順 番	題 名	発 表 者	時 間
研究発表 C-1	日本語学習者と母語話者コーパスに基づく 再帰代名詞「自分」の用法の対照分析	李 雪晴 (天津外国語大学・院)	9:30～10:00
研究発表 C-2	再誘いに対する断りの談話展開に関する 日中対照研究	楊 雪 (広島大学・院)	10:05～10:35
司 会 王 学群 (東洋大学)			
研究発表 C-3	日本語と中国語の再帰代名詞「自分」と “自己”に関する対照研究	鄭 浩雯 (大阪大学・院)	10:40～11:10
研究発表 C-4	日中名詞の程度性表現に関する対照研究 —日本語「N すぎる」構文と中国語“太 N”を例に—	崔 筱玉 (電子科技大学・院)	11:15～11:45
司 会 吳 川 (日本大学)			
昼 休 憩 / 理 事 会 (別 URL)			11:45～13:30
午後の部			
研究発表 C-5	学習者の誤用例から見た日本語と中国語の相違 —日本語の「心情」「気持ち」「気分」「機嫌」の使い 分け及び中国語訳の考察—	柯 俊文 (京都外国語大学・院)	13:30～14:00
研究発表 C-6	“都”における先行詞の解釈問題 —「X とも」と対照して—	張 瑩 (北海道大学・院)	14:05～14:35
司 会 張 黎 (大阪産業大学)			
研究発表 C-7	日本語と中国語における改善要求談話の比較 —開始部に着目して—	李 曉丹 (広島大学・院)	14:40～15:10
研究発表 C-8	中国人日本語学習者向けの教材における いわゆる様態の「ソウダ」の翻訳問題 —「ヨウダ」「ソウダ」と 中国語“好像”との比較分析から—	劉 怡 (名古屋大学・院)	15:15～15:45
司 会 藤原 優美 (広島市立大学)			
閉 会 の 辞		会長 彭 飛(京都外国語大学)	15:50～15:55
会員総会			15:55～16:20

次ページに続く



研究発表
分科会 A

研究発表 A-1

発表者：方 敏(東華理工大学 講師)

発表題目：中国人大学生のグループチャットにおける怱(dui)について —傍参与者の反応に着目して—

本文要旨：

中国では親しいもの同士の間で行われる怱(dui)は「遊びとしての対立」と捉えられている。これまでの研究では主に二者間の会話に注目し、怱(dui)の行い手・受け手のどちらか側の言語行動について論じられてきた。グループチャットにおける怱(dui)の参加者のやりとり、特に怱(dui)の傍参与者がいかに会話の進行に貢献するかに言及されていない。そこで本研究では、中国人大学生によるグループチャットの怱(dui)を対象に、傍参与者の反応を分析する。会話における役割変化の有無によって、それをずっと傍参与者の役割に徹底する「役割変化なしパターン」と怱(dui)の行い手が受け手に切り替わる「役割変化ありパターン」に分類した。「役割変化なしパターン」では、傍参与者は怱(dui)を無視したり、笑ったり、野次馬をしたりする行動を取った。「役割変化ありパターン」では、元々の傍参与者が怱(dui)の行い手・受け手に切り替わり、冗談のフレームで相手に対立表明し、会話に参加した。また怱(dui)の対象が固定しておらず、会話の展開と共に常に変換することが観察された。

研究発表 A-2

発表者：林 嵐娟(大阪公立大学 非常勤講師)

発表題目：“我们在这儿可以休息休息吗？”は非文なのか

本文要旨：

本研究は、CCLを利用して次の(1)に対して(2)が非文かどうかを考察するものである。

(1)我们可以在这儿休息休息吗？

(2)我们在这儿可以休息休息吗？

筆者が授業で使用している教科書(『《最新版》一年生のコミュニケーション中国語』)には、(3)のような文法説明と、(4)のような練習問題がある。

(3)可以 + 動詞 「～してよい」——許可を表わす。(p.49)

(4)2 つぎの語を日本語の意味になるように、並べかえましょう。(補充問題 10)

1) 私たちはここでちょっと休んでもいいですか。(休息 这儿 可以 吗 我们 在 休息)

(1)は(4)の1)の参考解答、(2)は学生の大半による解答である。

“(n)可以在这里(v)”/“(n)可以在这儿(v)”(A組)と“(n)在这里可以(v)”/“(n)在这儿可以(v)”(B組)の二組、合計四パターンの用例を収集して分析した結果、次のことが分かった。

①A組では、約半分の述語が単一動詞であり、その後続部分に場所の利点を補足する内容が多い。

②B組では、修飾語付きの述語が9割以上を占める。

(1)では場所が焦点になるため、単一動詞が後続しやすいのに対し、(2)では行為が焦点になるため、詳細な述語がより強く好まれる。よって、文脈を抜きに考えれば、(2)は非文とは言えないものの、やや不自然な文だと言える。

研究発表 A-3

発表者：劉 士沢(名古屋大学・院)

発表題目：「告げ口表現」における裸動詞の完了を表す用法に関する考察

本文要旨：

“老师，他骂我/上课说话/拿我的橡皮。”のような「告げ口表現」には、テンスやアスペクトを示す成分がないのにも関わらず、明確に過去の出来事を表している。しかし、すべての裸動詞がこの機能を持っているわけではない。“*他得奖/写作业/借我。”のようなマイナスの意味が生じない表現(告げ口にならない表現)は、過去を表すことができない。本論文は、告げ口表現が超時時制という特徴を有していることを主張する。告げ口表現の「裸動詞(+名詞)」は、時間性が取り除かれた概念的な動作行為のみを表し、発話者の態度や判断による「一時的な属性」を含んでいる。これらの「属性」を有する時点では、必ず該当する行為が行われている状態であるため、「過去」の意味が生じている。これに対して、類似形式である“利物浦队开始进攻。”“希腊队换人。”

のような解説表現は、超時時制の特徴を持っておらず、発話者が出来事が起こった直後に効率的かつ客観的に伝える表現である。

研究発表 A-4

発表者：張 晨(広島大学・院)

発表題目：発話連鎖の観点からみた中国人日本語学習者のほめへの肯定型応答の出現パターン

本文要旨：

ほめは、ほめ手から認められたいという受け手の欲求を満たす肯定的評価である。ほめに応答する際に、同意することが選好されるが、自画自賛につながる恐れがあるため、受け手が葛藤状態に陥ることになる。日中接触談話において、中国人日本語学習者（以下 CJL）には否定型よりも肯定型の応答が多く見られる（張 2023）。しかし、先行研究では受け手の応答のみに焦点が当てられ、なぜ CJL が自画自賛と捉えられかねない肯定型を多用するかに関してはふれられていない。そこで、本研究では日本語母語話者（以下 JNS）との自然談話における CJL の肯定型応答を発話連鎖の観点から質的に分析した。

その結果、CJL の肯定型応答には、「A 初出ほめに直ちに同意するパターン」と「B 初出ほめには同意していないものの、一定のやり取りを経て同意するパターン」が確認された。A パターンでは、CJL が先行連鎖において「情報提供」や「ほめの誘発」を行うことが示された。また、B パターンでは、JNS のほめ手が本連鎖において「ほめの連発」を行うことが見られた。

研究発表 A-5

発表者：東 睿(京都大学・院)

発表題目：ホームベースによる視点選択について ―空間移動を表す「来る・行く」と“来/去”の類を中心に―

本文要旨：

本論文は、同じ発話場面では、日本語は常に「来る」か「行く」か「二者択一」のに対して、中国語は“来”と“去”を柔軟に置き換えるのはなぜでしょうかということをめぐる、ホームベースの概念を利用して考察した。ホームベースが目的地である発話になれば、話し手のホームベースか聞き手のホームベースか、ホームベースの所属性が日本語では機能している。日本語は話し手のホームベースのみに視点を置いて、話し手視点しか使わない。中国語では視点を聞き手のホームベースに寄せて表現するのも許される。さらに、ホームベースが目的地である移動事態と客観的な目的地に向かって移動する事態の比較を通して、日本語はホームベースを第一の要素と見なすが、中国語はホームベースを単に一つの要因とみなし、日本語のような支配性がないものであることがわかった。その理由は、日本語におけるホームベースによる視点制約が発話時と発話地より優先され、心理的帰属性と領域感を抱いているのに対して、中国語では全ての視点関与要素を、階層的に扱うのではなく、並列的に扱っているためである。それゆえ、「独立的な視点」の日本語と「包容的な視点」の中国語の対立関係が成り立つのである。

研究発表 A-6

発表者：王 凱男(岡山大学・院)

発表題目：現代若者の自然会話におけるぼかし表現の使用実態 ―性差に着目して―

本文要旨：

現代若者の自然会話において、「とか」、「みたいな」、「のほう」などのぼかし表現を用いる現象は頻繁に観察されるが、性差を含む社会言語学的観点からその使用実態を分析した研究はまだ少ない。また、話し手の性別だけでなく、聞き手の性別が話し手のぼかし表現の使用にどのように影響を与えるかについても解明されていない。

本研究では、コーパスを使用し、ぼかし表現の使用と性差の関係について調査及び負の二項回帰分析を行った。さらに、実際の発話例を示し、社会的性役割期待とぼかし表現の機能の二つの観点から、調査結果が生じる原因について分析した。その結果は以下のようになる。

ぼかし表現の平均使用回数において男女間の差は認められない。

男性は「みたいな」を、女性は「とか」をより多く使用する。

男性のぼかし表現の使用には、聞き手の性別による変化が見られないが、女性のぼかし表現の使用において、聞き手が男性の場合、女性のぼかし表現の使用頻度が増加する傾向が見られる。

この研究は、日本語学習者のぼかし表現への理解を深め、自然な日本語の習得とコミュニケーション能力の向上に役立つことが期待される。

研究発表 A-7

発表者：王 芸嬭(立命館大学外国語嘱託講師)

発表題目：疑問詞連鎖句 WH 要素同指关系再考

本文要旨：

疑問詞連鎖句是指“谁先回家，谁做饭。”这样，通过前后小句中相同数量且相同形式的 WH 要素相照应形成连锁关系的句式。众多先行研究指出，疑問詞連鎖句中相互照应的 WH 要素间具有外延逻辑意义上的同指关系，即先行的 WH 要素(Wh1)所指代的人、事或物与照应的 WH 要素(Wh2)所指代的必须一致。如上文例中，先回家的是“小王”，则做饭的也必须是“小王”。然而我们发现，并非所有疑問詞連鎖句中，WH 要素都具有这样严格的或者说狭义的同指关系。如以下(1)(2)两例中，(1)是狭义同指关系，“想吃的 x”和“吃的 y”完全一致；但(2)则很难理解成“姓赵的配吃的，吃得起的 x”和“给姓赵的作的 y”完全一致，只能理解为，从“姓赵的吃得起的 x”中选择 y。

(1) 饭菜随我们的意，想吃什么便吃什么。(ccl: 向恺然《留东外史》)

(2) 瞧姓赵的配吃什么，姓赵的吃得起什么，就作什么！(ccl: 老舍《赵子曰》)

因此，本文认为，疑問詞連鎖句中 WH 的同指关系至少应有狭义和广义之分，且应在此基础上再做细分。这种分类对于弄清连锁关系的产生机制，解释疑問詞連鎖句和典型条件句、Wh2 被有定指称词代替的 Wh1-D 句的差异有所裨益。

研究発表 A-8

発表者：徐 筱琦(関西学院大学・院)

発表題目：「わかる」と共起する「NP のこと」の使用条件に関する一考察 —学習者の誤用を手掛かりに—

本文要旨：

「わかる」は「NP のこと」と共起する場合、「ノコトの付加は随意的であるが、その意味は異なる」(田窪 2010: 126)とされている。「義務的ノコトでは『理解する』の意味」であるが、「随意的ノコトでは『気づく』になる」(田窪 2010: 126)と指摘されてきた。しかし実例に目を向けると、(1)と(2)では同じ「理解する」の意味となるが、「わかる」は「NP のこと」と共起することもあれば「NP」と共起することもある。

(1) わたくしは、太郎と結婚して 20 年にもなるが、いまだに彼がよくわからない。

(2) 48 年連れ添ってきたけど、結局、彼のことがわからなかった。

そこで本発表では、「わかる」と共起する「NP のこと」の使用条件を考察することを目的とする。『現代日本語書き言葉均衡コーパス』『朝日新聞』といったデータベースを用い、名詞句の性質が「のこと」の付加に関与しているのかを明確にしたうえで、「のこと」の有無によって、名詞句にどのような意味的なニュアンスが生じるのかを、コンテキストを考慮に入れながら分析を行う。

分科会 B

研究発表 B-1

発表者：郭 婧(広島大学・院)

発表題目：合意形成談話における「カモシレナイ」の婉曲用法の使用傾向 —日本語母語話者を対象に—

発表要旨：

日本語の「カモシレナイ」は「～の可能性がある」を表す推量用法の他に、対人的配慮に基づいて主張抑制や断定回避などを表す「婉曲用法」があることが指摘されている。特に配慮が必要となる談話場面では、「カモシレナイ」が婉曲表現として使用されることが重要であり、円滑なコミュニケーションを行うことに繋がると考えられる。そのような場面の一つに合意形成場面がある。意見の食い違いが見られやすい合意形成談話では、目的を遂行するために過度に相手に自己主張を押し付けると、相手との関係が気まづくなる恐れがある。合意形成を行う過程で良好な対人関係を保ちつつ自分の主張を伝えようとするためには、婉曲表現を適切に使用することが必要である。そのため、合意形成談話において、「カモシレナイ」の婉曲用法をどのように使用するかが重要になる。

本研究では、合意形成談話における「カモシレナイ」の婉曲用法をどのように使用しているかについて、使用される婉曲用法の種類及び婉曲用法と発話内容への関わり方という観点から、日本語母語話者の使用実態を明らかにする。それを通して、日本語学習者の円滑なコミュニケーションの実現に寄与することを目指す。

研究発表 B-2

発表者：姜 雨軒(大連外国語大学・院)

発表題目：日本語の「使役移動表現」における習得研究 —中国人日本語学習者を対象として—

発表要旨：

使役移動表現とは、使役行為によって、移動物の移動が引き起される移動事象である。客体移動表現とも呼ばれる場合もある。このイベントは、人間の認知活動の最も基本的なパターンの1つである。

本研究では使役移動表現に焦点を当て、日本語専攻の大学生、大学院生計 85 人を研究対象として、共通の使役移動事象を表すビデオ映像を用いた言語産出実験を行った。そして、三つの使役手段と四つの経路との組み合わせで、SPOT テスト結果により、調査集団を上・下のグループに分けて、主要部で表される主要動詞の語彙化パターンを対照しながら、学習者の使役移動表現の共通点と相違点を明らかにした。中国人日本語学習者の使役移動表現にみられる特徴を分析することで、学習者の学習レベルの影響や母語の影響、目標言語の言語類型の影響の有無を明確にした。

研究発表 B-3

発表者：張 夢華(関西学院大学・院)

発表題目：「VP の/ことができる」という構文における形式名詞「の」と「こと」の選択条件

発表要旨：

中国で出版されている教科書には、「ことができる」はある可能性や能力を表す文型として記述されているものの、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』Ver.12 で調べてみれば、以下のような誤用例が見られる。

(1) 前に述べた通り韓国語の擬音、擬態語は名詞、動詞、形容詞、副詞を作る<の→こと>ができる。

(学習歴 3 年半)

(2) 本屋で村上春樹の本を買いたかったが、店員さんに「ちゃんと名前も読めないのに、「村上春樹さんの本を読む<の→こと>ができますか」と聞かれて、今もそのことが脳裏に刻まれています。

(学習歴 2 年)

用例 (1) (2) において「の」を使って誤用と判断され、「こと」に直された用例である。しかしながら、可能性や能力を表すとき、(1) と (2) のように「の/ことができる」は使えないのかという疑問を抱き、『毎日新聞』『中日新聞』において検索してみたら、実例ができてきた。そこで、本研究は「VP の/ことができる」という文における「の」と「こと」の選択条件を明らかにすることを目的とする。

研究発表 B-4

発表者：孫 盈盈(大阪大学・院)

発表題目：“自己”の照応用法に関する研究

発表要旨：

これまで、“自己”の照応用法についてはほとんど統語論的なアプローチから研究されてきた。その中、特に“自己”の指示対象の確定および照応表現と先行詞のテキスト上の距離が焦点として扱われてきた。しかし、従来の研究には“自己”の照応用法のメカニズムに対する理論的考察がまだ不十分と言える。

そこで、本発表では東郷(1999,2000)の「談話モデル理論」と澤田(2009)の「直示的視点」を併用し、小説の地の文と自然会話における“自己”の照応用法のメカニズムの解明を試みた。その結果は以下の通りである。

小説の地の文の場合、“自己”が指しているのは、談話モデル 1 の言語文脈領域に埋め込まれた談話モデル 2 の発話状況領域に登場する人物である。一方で、自然会話における一人称照応用法と三人称照応用法を分析すると、話し手が共有知識領域に格納されている指示対象にアクセスしながら、言語文脈領域の談話指示子を“自己”で指している。これに対して、二人称照応用法の場合、話し手が発話状況領域の談話指示子を言語文脈領域に導入し、“自己”で指示していることが判明した。

研究発表 B-5

発表者：黄 巧靈(大連外国語大学・院)

発表題目：中国人日本語学習者による「自律移動表現」の習得研究

発表要旨：

移動表現の言語形式は言語によって異なっている。日本語は典型的な「動詞枠付言語」であり、自律移動表現の場合は経路がよく主要動詞で表される。中国語は日本語と異なる言語類型に属し、中国人日本語学習者は自律移動表現を産出した場合には、どのような特徴が見られるのか、そして学習者レベルの違いによってどのような違いがあるのかについて考察を試みた。

本研究では日本語を専攻とする中国人日本語学習者 85 人を対象にし、ビデオ映像を使用した言語産出実験を行った。そして SPOT により、学習者を上位、下位レベルに分け、類型論と語彙化パターンの理論的枠組みに基づき、産出した文における主要部として担われる動詞が自律移動事象のどの側面に着目して言語化しているのかを分析した。レベル別の中国人日本語学習者が同一の自律移動事象をどのように表現するのかを比較しながら、学習者の言語特徴を明らかにした。

研究発表 B-6

発表者：顔 曉冬(大連外国語大学・日本語教師)

発表題目：情報縄張り理論に基づいた終助詞「よ」の談話機能

発表要旨：

本稿では情報縄張り理論に基づき、談話分析という手法を用いて、伝達情報に着目し、それを話し手の縄張り内情報、聞き手の縄張り内情報、第三者についての情報、話し手・聞き手両者の縄張り内情報の 4 つに分類し、終助詞「よ」の談話機能を分析していきたい。

話し手の縄張り内情報による終助詞「よ」は、「よ」の使用例のうち、典型的な使い方であり、話し手の情報「優位性」を伝える。聞き手の縄張り内情報による「よ」は、文の種類に基づき、さらに提案文、述べ立て文、命令文のように 3 つに分けて、分析した。

第三者についての情報は話し手と聞き手にとって、どちらも＜遠＞情報であり、使用制限は見られないため、この種の「よ」の使用は典型的であり、使用例も多い。話し手・聞き手両者の縄張り内情報は、「よ」は伝聞表現とよく共起することが特徴の 1 つである。

研究発表 B-7

発表者：劉 玲伶(株式会社 ProoProo)

発表題目：AI 歌を活用した日本語五十音の効果的な習得法の開発

発表要旨：

本研究では、AI 技術を活用した歌を用いることにより、日本語の五十音習得を効果的にサポートする新たな学習方法を開発し、その効果を検証した。音楽を用いた日本語教育の有効性は既存の研究によって示されているが、普及には限界があった。特に、教師の音楽制作に関する専門知識が必要とされることが障壁となっていた。先行研究(劉 2024)では、AI 歌を用いることで、この障壁を克服し、語彙習得における効果を示唆していた。本研究はこれに続き、の五十音学習への応用を試みた。この研究では、従来の学習方法と AI 歌を用いた学習方法の二つを比較検討し、学習効果の差異を明らかにする実験を行った。実験の結果、AI 歌を用いた学習グループは、発音の正確性と記憶の定着度において、従来の学習方法を用いたグループに比べて有意に高い成績を示した。また、学習モチベーションに関するアンケートでは、AI 歌を用いた学習が学習者の関心を引き、学習意欲を高める効果があることが確認された。これらの結果から、AI 歌を活用した日本語五十音の学習方法は、従来の方法に比べて効果的であり、学習者にとって魅力的な選択肢となり得ることが示唆された。

分科会 C

研究発表 C-1

発表者：李 雪晴(天津外国語大学・院)

発表題目：日本語学習者と母語話者コーパスに基づく再帰代名詞「自分」の用法の対照分析

発表要旨：

再帰代名詞は、それ自体では十分な意味を表すことができず、文中の名詞、即ち先行語に依存して初めて意味的に完結される照応形の一つである。本研究は中国人日本語学習者作文コーパスを研究材料とし、学習者による日本語の再帰代名詞「自分」の用法分布や使用状況を検討するとともに、日本語母語話者によるコーパスとの対照を行ったものである。第二言語習得研究と日本語教育現場に示唆を目指している。それを分析した結果、以下の点を明らかにした。

- (1) 学習者作文コーパスによる「自分」の用法の用例数の順序は「照応＞普遍的指示＞人称代名詞」であった。母語話者コーパスとの共通点は、「照応」用法が一番普通に使われている。相違点は、学習者コーパスでは第二位となった用法が「普遍的指示」であったが、母語話者コーパスでは「人称代名詞」用法となった。
- (2) 「照応」用法についてさらに詳細的に分析した結果、先行語の性質の面では、母語話者コーパスによる「自分」の先行語はすべて有情のものであるが、学習者コーパスによる「自分」の非情の先行語の例が

出てきた。文法機能の面では、学習者と母語話者による「自分」が文中で担う成分は大いに違っている。

研究発表 C-2

発表者：楊 雪(広島大学・院)

発表題目：再誘いに対する断りの談話展開に関する日中対照研究

発表要旨：

本研究はロールプレイを用いて、日本語と中国語の再誘いに対する断り談話の好ましい展開パターンを明らかにすることを目的とする。調査対象は親しい友人関係である日本語母語話者同士と中国語母語話者同士の各6組で、「今週末の食事の誘い」という場面が設定された。その結果、日中の断りの談話展開の特徴に関して、最終的に誘いを断るか承諾するかによって、二つの展開パターンに分けられる。まず、最終的に断る場合、日本語では複数の意味公式を用いることで断りを実現していたが、中国語では理由を強調することで断りを実現しているという違いがある。次に、承諾する場合には、「無条件承諾」と「条件付き承諾」に分類される。無条件承諾の場合、日本語では【共感】と【理解】を用いることで、再誘いに対する承諾を実現していたが、中国語では割引情報などの情報を提供して承諾される。条件付き承諾の場合、日本語では、断る側が承諾のための条件を提示する傾向が見られた。それに対して、中国語では、【代案】と【情報提供】が用いられ、誘う側が主導することで、承諾される傾向があることが分かった。

研究発表 C-3

発表者：鄭 浩雯(大阪大学・院)

発表題目：日本語と中国語の再帰代名詞「自分」と“自己”に関する対照研究

発表要旨：

従来、日本語の「自分」と中国語の“自己”について多くの研究がなされてきたが、両言語における対照研究が充分になされているとは言えない。Kuno(1972)や Kameyama(1984)によれば、「自分」の先行詞は「自分」をc統御しなければならない、そして、先行詞は主語指向性と有生性といった特徴がある。Tang(1989)や Huang & Liu(2001)によると、中国語の“自己”も「自分」と同じ特徴を持っていることがわかる。しかし、両言語において、これらの特徴、特にc統御関係と主語指向性に反した例文も発見された。例えば、(1)のように日本語では主語でないカラ格を持つ名詞句は先行詞になれる。(2)のように中国語ではsub統御の例文も挙げられる。

(1)刑事はその政治家iから暴力団が自分iを脅していることを聞いた。(Baker & Ikawa 2022:3)

(2)张三i做事小心的态度救了自己i。(Tang 1989: 96)

本稿では、以上の用例に基づき、Charnavel(2020)の仕組みを援用し、「自分」と“自己”の先行詞の選択について議論を行う。Charnavel(2020)の研究方法は両言語に適用することができ、そして、両言語において再帰代名詞の先行詞の選択差を説明することができると明らかにする。

研究発表 C-4

発表者：崔 筱玉(電子科技大学・院)

発表題目：日中名詞の程度性表現に関する対照研究 ―日本語「Nすぎる」構文と中国語“太N”を例に―

発表要旨：

近年、日本語では「Nすぎる」構文、中国語では“太N”構文といった名詞程度化表現が若者を中心として使用範囲を広げている。両者は共通する部分もあるが、相違する部分もある。本発表では、BCCWJ コーパス、BCC コーパス、「X」と「Weibo」からデータを収集し、両構文の意味と組み合わせ可能な名詞の異同について明らかにする。

「Nすぎる」構文及び“太N”構文は大きく五つの構文的意味を持っていることが指摘できる。まず、共通するのは、次の(1)(2)のようなタイプである。

(1) a. 美人すぎる b. 太美人了

(2) a. 天使すぎる b. 太天使了

程度が高い場合、典型的な場合は日本語と中国語共に同様に用いる。次に、異なるのは、次の(3)~(5)のようなタイプである。

(3) a. 沼すぎる b. *太沼泽了→像陷入沼泽一样/太沉迷了

(4) a. 俺すぎる b. *太我了→太像我了

(5) a. タイプすぎる b. *太我的类型了→太是我的类型了

明白な比喻の場合、名詞の持つどの要素の程度を取り上げているのか特定しにくい或いはできない場合、及び名詞の意味を確定できない場合は日本語と中国語で異なる。本発表ではこうした日本語と中国語で異なる状

況について詳しく考察する。

研究発表 C-5

発表者：柯 俊文(京都外国語大学・院)

発表題目：学習者の誤用例から見た日本語と中国語の相違

—日本語の「心情」「気持ち」「気分」「機嫌」の使い分け及び中国語訳の考察—

発表要旨：

本研究は中国語を母語とする日本語学習者の誤用例からその原因を探り、日本語の類義語及び中国語訳の特徴に関して考察する。そして、『日本語オノマトペ辞典』1、《現代汉语词典(第七版)》2などの辞書を参考にして、中国語の“心情”は日本語の「心情」とは異なることが分かる。日本語の「心情」「気分」「気持ち」「機嫌」の使い分けに関して考察する。日本語の「心情」の用い方の特徴、日本語の「気分」の用い方の特徴、日本語の「気持ち」の用い方の特徴、日本語の「機嫌」の用い方の特徴と中国語の“心情”の用い方及び日本語訳の特徴の調査と分析研究を通じて、中日間の気持ちの表現に大きな違いがあることが得られた。中国語の“心情”の用い方は口調の変化をより強調し、日本語の“気持ち”の用い方は形態と表現力の変化をより強調すると考えられる。日本語の擬態語は、中国語の翻訳にも形態的に似ていることがあると思われる。

研究発表 C-6

発表者：張 瑩(北海道大学・院)

発表題目：“都”における先行詞の解釈問題 —「Xとも」と対照して—

発表要旨：

先行研究によれば、“都”は先行詞を部分集合の集合と解釈させる機能を持つ。これは“都”構文に自由変項(Cov)があるためであり、“都”が何を全称量化するのかは文脈によって異なると説明されている。しかし、その部分集合を構成する要素を決定するメカニズムについては言及されていない。

筆者はReinhart(1997)の提唱した選択関数を用い、“都”構文における先行詞の値は選択関数で決まると主張する。筆者の分析により、“都”構文における選択関数はCovかEVERYのどちらかを選択することが判明しており、[Covの値=先行詞の最大値]の場合、または顕在的“毎”がある場合、選択関数はEVERYを選択し、[Covの値<先行詞の最大値]の場合、選択関数はCovを選択する。

日本語の「Xとも」は“都”と同じ振る舞いをし、「Xとも」における先行詞の解釈問題も同様にCovと選択関数をもって説明できる。ただし、“都”構文におけるEVERYは必ずしも顕在的とは限らないが、「Xとも」構文の場合は、X自体がEVERYの機能をし、顕在的でなければならない。

研究発表 C-7

発表者：李 曉丹(広島大学・院)

発表題目：日本語と中国語における改善要求談話の比較 —開始部に着目して—

発表要旨：

日常生活で見られる行為の一つである「改善要求」は、他の言語行為と同様、「改善要求—応答」という隣接ペアのみで行われるわけではない。改善要求発話を会話の場にどのように導入するか、そしてその会話をどのように収束するかというのも、円滑な人間関係の維持にとっては重要である。いずれの段階も重要であるが、相手にとって不利益な情報を会話の場に導入することの難しさと重要さをふまえ、本研究では開始部に着目した。

本研究は日本語と中国語における開始部の特徴を明らかにするため、日本語母語話者と中国語母語話者それぞれ8組を対象に改善要求談話を研究対象として、日中母語場面の比較について分析を行った。分析の結果、開始部に関して、日中ともに漸次的に開始していくパターンが見られたが、中国母語話者には「主導型」が見られた。特に、「質問攻め型」の割合が75%であり、顕著に高い。一方、日本語母語話者には「相互型」のパターンが見られたものの、開始部の基本的なパターンと見なせるものは見当たらなかった。

研究発表 C-8

発表者：劉 怡(名古屋大学・院)

発表題目：中国人日本語学習者向けの教材におけるいわゆる様態の「ソウダ」の翻訳問題

—「ヨウダ」「ソウダ」と中国語「好像」との比較分析から—

発表要旨：

中国人日本語学習者向けの教材における推量の「ヨウダ」といわゆる様態の「ソウダ」はいずれも「好像」に訳されることがある。そのため、学習者に「ヨウダ」と「ソウダ」の意味・用法を混乱させる可能性がある

と考えられる。そこで、本研究はなぜ両語が同じ訳になるのかという問題に焦点を当て、両語の共通点と相違点及び「好像」の意味を分析し、それを基に、両語と「好像」の対応、非対応を考察した。結果として以下のことを明らかにした。

「ヨウダ」と「ソウダ」は視覚的情報に関わるという点で共通しているが、「ヨウダ」は推測を表し、視覚的情報は推測の根拠である。一方、「ソウダ」は話者の視覚的情報に基づく眼前の現実を述べる場合に使われ、対象がそうである、またはある可能性があると感じられる様態をしていることを表す。

中国語の「好像」は主に推測の意味を表すため、同じ推測を表す「ヨウダ」に対応し、眼前の対象の様態に対する描写に焦点を当てる「ソウダ」との対応はできない。ただし、「好像要掉下来了(落ちそうだ)」といった臨場感を持つ特定の文脈では、外部の観察を表す「看上去」を必要とせず、「好像」を使うことで話者の視点が示される。

以 上